

〈原著論文〉

## セネガルにおけるタリベ保護センターでの ボランティア活動

—サン・ルイのコーラン学校ダーラで学ぶ  
子どもたちの生活環境と教育—\*

村 上 美奈子\*\*

### はじめに

セネガルやニジェールなどの西アフリカ諸国には、タリベ (Taribé) と呼ばれる、イスラム師匠であるマラブー (Marabout) の下に預けられ、コーラン学校であるダーラ (Daara) でイスラムの教えを学びながら生活している子どもたちがいる。セネガル国内だけではなく、ギニアなどのセネガルよりも経済的に厳しい国から、親にはマラブーから金銭が渡されて幼い時に預けられ、厳しい環境での生活を強いられている。

セネガルのタリベについて現地インタビュー調査などを行いながら研究をしている阿毛 (2017, 2013) の記述によると、元来ダーラとは西アフリカでもっとも長い歴史を持つ14世紀以来の教育機関であり、子どもたちが集団生活の中で「自主的に生きる知恵や社会のマナーを身につけ」(2017, p.22) ていくことによって「人格形成」(2013, p.45) や「人間形成」(2017, p.22) が図られているという。その中で、仏教国の東南アジア等で見られる托鉢や喜捨のようにお金や食べ物などをもらったり、三度の食事が終わる頃に各家庭を廻って残り物をもらったりして、それらのことを通して謙遜することや感謝することを学ぶのであるが、それが表面的に捉えられるとストリートチルドレンとして誤解されているようなところもある<sup>1)</sup>。

阿毛 (2017, p.24) の記述によれば、ダカールなどの「人と人のつながりの薄い都市部」では、上記のようにコーラン学校であるはずのダーラの役割が形骸化して、子どもが搾取されひどい体罰を受けている状況もあるということであるが、セネガルの北部サン・ルイ市 (Saint-Louis) のような地方都市のダーラでは、「地域に根ざした伝統教育が息づいてい」(2017p.23) るということである。また、1990年代以降の学校の近代化の流れの中で、2000年以降のワッド

---

\* *The volunteer activity in The Taribe Center in Senegal*

—*The education and the environment of the street children who learn in Daaras at Saint-Louis*—

\*\* Minako MURAKAMI 立正大学社会福祉学部社会福祉学科特任講師

キーワード：セネガル、タリベ、ダーラ、教育

前大統領政府は、今までインフォーマルだった「フランコ・アラブ学校 (Ecole Franco-arabe)」や「近代的ダーラ (Daara Moderne)」を私立の教育機関として認定しているというが、「近代的ダーラ」の教育環境やカリキュラムは伝統的なダーラとは大きく異なるということである(2013p.42, 2017p.34)。

筆者は2009年の4月から6月にかけてフランス西部の高校で日本文化を紹介するという授業を週に8コマ担当させていただく機会を得たが、その際、教材を探すために地域の図書館や書店に行って児童書をいろいろと見ていた時にアルジェリアなどのアフリカ諸国をテーマにしている子ども向けの本に多く出会い、その時の滞在でフランスでの生活をとても楽しんでいたのであるが、フランスの植民地であった国々から見るとフランスに対して異なる見方になるのではないかということがとても気になった。その後、フランス語圏の西アフリカで子どもの教育に関わる活動に短期間であれ参加することを夢見続けてきたのであったが、それからおよそ10年後の2019年2月ようやく、セネガルのサン・ルイ市にあるタリベの保護センターで1週間のボランティア活動に参加する機会を得た。

今回滞在したサン・ルイ市はセネガル北部のモーリタニアとの国境にあり、大西洋に面していて、首都のダカルから車で3、4時間ほどの距離である。1659年にフランスがこの地に最初の商館を建設して以降「フランス領西アフリカ」植民地の首都がおかれていた場所であって今も街並みにその名残があり、世界遺産に指定されていて、漁業が盛んである。サンテグジュベリが『星の王子さま』を執筆した場所もサン・ルイ島である。

本稿では、サン・ルイのタリベ保護センターでのボランティア活動を通して関わった子どもたち、およびセンターのスタッフやボランティアとの交流を振り返り、センターの活動内容やその意義について考察する。

## 1. セネガルにおける教育に関する日本での先行研究の状況

日本でのセネガルの教育に関する論考には、大きく分けて3つのものがあり、①政府が積極的に関わっているものやJICA等での支援も含めた、直接に現在のセネガルの教育現場と関わって支援者としての立場から課題や施策などをまとめたもの(独立行政法人国際協力機構人間開発部2007, 2015等、後述の注2を参照のこと)、②フランス植民地時代からの教育政策を踏まえ、言語政策との関連等も含めた歴史的背景を丁寧に追いながら、セネガルの教育を現在の形で成り立たせている土台について研究したもの(古沢1994, 谷口2009a, 2009b, 小綿2017等)、③イスラムの暮らしやその地域共同体の文脈の中での人間形成や伝統的なコーラン学校の位置づけを捉えた文化人類学的なフィールドワークを活かした研究(阿毛2017, 2013)があり、また、それらの3つとは別に、日本の学校での教材としてセネガルを扱ったもの(馬野, 渡辺

2009)がある。セネガルにおける公教育について語る際には、上記の①や②を中心に見ていくのが「西洋」式の「近代」の教育制度の普及を考えるためには一般的かも知れないが、その地域の風土や慣習の中での教育実践についてより実質的に考察していくためには③の視点が大きいと重要であると思われる。

これらの①から③に関して、より詳細に見ていくと、まず①では、セネガル政府に積極的に働きかけていくためのものと JICA 等の現場での直接的な実践を報告または分析したものとに分けられる。

①の前者に関しては、セネガルでは初等就学率が80%を越えたものの最終学年まで到達する確率が50%前後である(2005年)という課題を踏まえて、共和国政府が2000年に「教育・訓練10カ年計画(PDEF: Programme Décennal de l'Education et la Formation du Sénégal)」を策定し、2002年には大統領令で「学校運営委員会(CGЕ: Comité de Gestion de l'Ecole)」の設置を定めたことを受けて、日本から初等教育教員養成や理数教育に関する調査やプロジェクトの実施と評価等を行った成果をまとめたものが多く見られる<sup>2)</sup>。

①の后者、つまり JICA 等の実践に関しては、サン・ルイにおいてタリベの子どもたちを対象に美術的創作活動等を行った青年海外協力隊員の西村綾介(2017)の報告の他、セネガルにおける青年海外協力隊員の手工芸や食物教育実践とその意義について検討した横山・杉原(2010)、青年海外協力隊での経験を踏まえてセネガルの子どもたちの生活を生き生きと伝えている藤原(2016)の記事がある。

②に関しては、特に今回活動したサン・ルイがフランス植民地時代に総督が置かれていたということもあり、セネガルや西アフリカにおける公教育の展開において重要な役割を果たしてきたことが分かる。古沢(1994)によるフランス領西アフリカ AOF (Afrique Occidentale-Française)における植民地教育政策研究では、19世紀から20世紀初頭にかけての歴史が言及されている。例えばその中では、1817年に設立された「サン・ルイ相互教育学校(école mutuelle de St.Louis)」や、1840年代に修道会によって「サン・ルイ中等学校(cours secondaire de St.Louis)」として設立され、途中で閉鎖を経ながらも再開して1919年に「フェデルブ高等学校(Lycée Faidherbe)」となった中等学校、1880年代にサン・ルイに数校あった修道会経営の男子校、同女子校、世俗学校、新教派福音伝導会の学校についての記録、1907年にサン・ルイに設置されて1913年にゴレ(Gorée)に移転した「初等師範学校(école normale d'instituteur)」、1903年に同じくサン・ルイに開設された「上級職業学校(école supérieure professionnelle)」についての記述がある。

また、小綿(2017)は、古沢や谷口(2009a)による先行研究を踏まえつつ、一次資料にも当たりながら、セネガルで初めて初等教育からその先の進学先までを包括的に定めた制度が整備されるに至る1903年の政令(arreté)に主に注目して研究をまとめている。1817年にセネガルで最初にサン・ルイに西洋式学校が開かれたことや、1819年にはセネガルで最初の女子学校もサン・ルイで創立されたこと、そして、1855年にはセネガル総督フェデルブによって通称「人

質学校 (école des otages)」が作られ、1864年には「首長の息子たちと通訳の学校 (école des fils des chefs et de interprètes)」と改称されたものの、その学校の目的はフランスの支配に協力的な現地人支配者の養成であったことが示されている。さらに、教育機関とイスラム教との関係についても述べられていて、マラブー (イスラム師匠) による教育に関する規制が1857年と1870年にまずはサン・ルイにのみかけられ、そのような規制が修正を加えながら1896年には他の地域も対象とされていったとしている。しかしその中でも、マラブーの下で学ぶ生徒数はフランスの学校の生徒数を凌駕し続けていたことが明らかにされ、そのことを巡るイスラム教とフランス支配の対立や協力への変化の状況にも言及が及んでいる。その他にも、古沢 (1994) も触れていた「フェデルブ校」や「師範学校」に関してのより詳細な記述もある。

これら、古沢や小綿の論考の他に、小綿も参照している谷口は、二言語教育や言語教育政策の観点から (2009a, 2009b)、フランス領西アフリカにおける教育政策の展開を追っている。セネガル等の西アフリカの各国では1960年のフランスからの独立以降にアフリカの多くの地域で見られる使用言語の三重構造、つまり、「公用語 (langues officielle)」、 「媒介言語 (langue [s] véhiculaire [s])」、 「群生言語 (langues grégaires)」 (2009b) が場面に応じて使い分けられている。その状況の中を踏まえて、いかにして「公用語」だけではなく「媒介言語」が公教育に取り入れられて行ったのかが検証されている。これに関連して、セネガルの媒介言語であるウォロフ語が拡大していった経過については、砂野 (1999, 2009) が詳細な研究をしている。

③に関しては、本稿第3章で詳述するが、「はじめに」で既に述べたようなタリベについての視座を与えてくれている。西洋近代の公教育制度のみにとらわれることなく人間形成のあり方を捉え直す視点は、極寒の地に暮らすヘヤー・インディアンの子どもの成長を記述した原ひろ子 (1979) のスタンスを踏襲したものであると言える。

## 2. サン・ルイでの1週間の滞在

前章では、先行研究を概観しながら、植民地時代にフランス領西アフリカの総督が置かれたサン・ルイ市が、セネガルや西アフリカにおける公教育の展開において重要な役割を果たしてきたことを確認した。本章では、そのサン・ルイ市での1週間の滞在を振り返り、そこでお世話になったある家族の生活や社会の景色を描写したい。なぜならば、教育について考える際には、制度上の公教育のあり方を考えるだけでは不十分であって、様々な生活や文化の状況を踏まえて、その上で教育の目的が定められたり、その生活の中から教材や教育の方法が考えだされていったりするべきだと思うからである。

サン・ルイでは、ボランティア先の団体で手配していただいたホームステイ先で1週間お世話になった。他の多くのボランティアの人たちは、ボランティア先のセンターから歩いて通える範囲にホームステイをしていたが、私が割り振られたのはタクシーで10分ほどの所にある家

庭だった。

第4章で述べるように、ボランティア先での活動は毎日、午前中と夕方の両方だったので、1日に2往復ずつタクシーを使った。1回につき100円ほどの金額である。タクシーの運転手はフランス語で会話を楽しむ人も多かったが、こちらが天気の話でもして会話を始めようとする、「フランス語は分からない」と言ってフランス語では料金のやりとりや行き先しか話をしなかった運転手もいた。第1章でも言及したがセネガルの媒介言語はウォロフ語であり、ダカールやサン・ルイなどの大きな町では日常の会話はウォロフ語を使うのが一般的である。

ホームステイ先のお父さんは高校のフランス語の先生をしていて、お母さんは小学校の先生をしている。4歳から18歳までの4人の子どもがいて、屋内の土間の中のコンクリートに囲われたスペースにはペットの羊を飼っている。家族どうしの会話はほぼすべてウォロフ語であるが、小学生以上は皆フランス語もしっかりと使うことができ、車の中ではフランス語の子どもの歌を流しながら一緒に楽しそうに歌っている。

ホームステイ先の家はコンクリート2階建ての頑丈な家で、私ともう一人のボランティアが2階の1部屋ずつを使わせてもらっていた。サン・ルイ市内で最も大きな2つの塔のあるモスクのすぐ裏にあり、夜明け前からコーランの声がスピーカーを通して聞こえ始め、夜が明けると一気に大音響になる。金曜にはお父さんと4歳の息子がイスラム教の礼拝服を着て厳粛な雰囲気漂わせていた。

到着した日曜日はセネガルの大統領選挙の日で、お母さんは勤務先の学校が選挙会場になっているということで出勤していた。お父さんが3人の子どもとボランティアの私たち2人を大きな車に乗せて、大西洋に面した漁師島にある、お父さんとお母さんのそれぞれの実家に連れて行って下さって、その日はその両方の家で合わせて2回の昼食をいただいた。

セネガルの一般的な食事は、朝食はバゲットとコーヒーで軽く済ませ、昼食と夕食は家族みんなとそこに居合わせた人たちと一緒に、直径が80cm くらいの大きなお皿を囲んでチェブジェンという炊き込みご飯に手を伸ばす。チェブジェンとは、丸ごと煮込まれた野菜や油で揚げた魚、肉が盛りつけられた味付きのご飯で、普段から手で食べている人たちは右手で一口分ずつよく握って混ぜながら食し、私たちにはスプーンが配られる<sup>3)</sup>。部屋にレジャーシートの大きさの布を敷いてその中央に大きなお皿を置き、親戚などが多く集まっている時にはだいたい10人ずつぐらいに分かれてその大きなお皿を囲んで食事をする。その食事に不慣れな私たちや幼い子どもたちのためには、家の人が具材をスプーンや手で一口大にちぎってそれぞれの前に配ってくれる。魚であれば骨を外しやすい部分を選んで分けてくれるような心遣いもある。

私のステイ先では、昼食は14時頃、夕食は21時か22時頃であり、食事の支度の時間になるとまず14歳の長女が細長い木製の臼と杵のような調理具でスパイスをトントンと叩きつぶし始める。10分から20分ほどその作業をしたら、後はお母さんがその続きの本格的な調理に取りかかり仕上げまで行う。味付けの時にはその長女がお母さんの指示に従って調味料を取ってきたり、10歳の次女は4歳の弟の面倒を見たりして手伝いをしている。18歳の長男も、パンを買ってき

たり、弟のトイレの世話や幼稚園への送迎などをしたりと、子どもたちもそれぞれに家族の中での役割を果たしている。

日本に帰国してセネガルのことを知らない人に話をして最も驚かれるのは、この家庭では4歳の末っ子がすっかりスマホに夢中になっていて、フランス語や英語の子ども向け動画をユーチューブでいろいろと見ているということである。日本の子どもたちもスマホ等とのつき合い方に模索を必要としているが、私たちとはずいぶんと普段の生活文化や習慣が異なるセネガルの子どもの育ちにもグローバルな課題や可能性が押し寄せていることを感じた。

この滞在中の最も印象深かった光景として、外から来た者に対する子どもたちの好奇心丸出しの情景がある。

着いたばかりの日曜の午後にホームステイ先の10歳の女の子に連れられて、お父さんの実家から歩いて10分ほどの大西洋の浜辺に行った時のことである。その子と私が歩いていると、小学生ぐらいの男の子たちがたくさん集まってきて私に挨拶をしたり名前を聞いたりする。子どもたちだけではなく玄関先にいる大人たちも一斉に私に視線を送り、そこで日本と違うのは、目が合うとそらすのではなく挨拶を交わすことなのであるが、とにかく子どもも大人も見慣れないよそ者に対する好奇心が隠せないのである。そのような経験をした初日ではあったが、ボランティア活動の最終日である金曜の午後センターの前に出て子どもたちと遊んでいたら、斜め向かいの家に1台の車が止まって、ヨーロッパから来たと思われるバックパッカーの女性が降りてきて建物に入っていった。子どもたちは遊びを休止して、いったいどんな人が車から降りてくるのかと注意を向ける。実はその時に私も子どもたちと同じ好奇心で車を注視している自分に気づき、たった1週間の滞在で逆の立場になってしまったことをおかしく思った。私たちが活動を終えてセンターを出る頃にその女性は玄関先でずっとこちらを見ていたので話しかけてみたら、フランスのリヨン近郊から来ていて、アフリカを知り合いづてにいろいろと訪問しているうちにここにたどり着いていつまで滞在するか決めていないということ話を話していた。平穏な日々に入り込んでくるよそ者としての対象にもなりながら私たちは異なる文化に触れ、ボランティア活動を通して人と人との関わりとしてささやかながらも子どもたちの記憶となり、場合によっては新しい扉が開くことにもつながると思った。

### 3. タリベやダーラの位置づけ

既に「はじめに」で述べたように、阿毛（2013, 2017）の研究によれば、ダーラは集団生活を通して「人格形成」あるいは「人間形成」の場としての機能を果たしているという側面もあるという。

第1章の、セネガル政府に対する日本からの教育環境の整備に関するプロジェクトについての先行研究の分析からも分かるように、セネガルにおける就学率は近年になって向上してきたものの、公教育制度の外に位置づけられるダーラを教育機関として活用したり認識しようとし

たりする動きは古くからある。

例えば、第1章でも参照した小綿(2017)の指摘にもあるように、マラブーの下で学ぶことに対しては19世紀半ば以降に植民地政府が規制を加えるようになっていったが、19世紀末から20世紀初めにかけては、「植民地政府のイスラム教徒に対する認識が、敵として規制すべき存在から統治のために利用すべき存在へと変化しつつあった」(p.52)状況を背景として、教育政策においても同様の影響があったと考えられる。

参考までに、西アフリカ地域での教育の普及においてダーラがいかに現実的な初等教育の場として機能しうるかということについて考えるために、ここで参考までにブルキナファソでの数値を挙げておきたい。ブルキナファソでは、「ストリートで寝起きする子どもたちは、国家の制度下にある学校には通っていない」(清水2017, p.42)一方で、そのような子どもたちであってもコーランを学ぶ学校には関わっている割合が一定数あり、2014年の調査では、小学校には40%、中等教育には6%が通った経験があるのに対し、コーランを学ぶ学校に通った経験がある子どもは35%にも達した。また、2009年の別の調査では、コーランを学ぶ学校への通学経験は45%の割合だったという(清水2017, p.42)。

このような量的な存在感とは別に、社会の中でのダーラやタリベの役割として、清水(2013, 2017)は、ニジェール(2013)やブルキナファソ(2017)での研究を通して、ダーラやタリベがその地域の村落社会において、社会経済的にも宗教的にも、「なくてはならない」(清水2013, p.48)ものであったり、あるいは、「聖性をそなえた子どもたち」(清水2017, p.43)としての役割を果たしていたりすると分析している。ニジェールでは賃金を伴う農業労働力のストックとして、また、ブルキナファソでは喜捨の受け手となっていて、それぞれに社会的機能の一翼を担っているというのである。

ここまで、ダーラやタリベを教育や子どもの成長、役割といった観点から見てきたが、文献によってはダーラを農業共同体として説明しているものもある<sup>4)</sup>。教育機関としての役割を果たす組織や経済システムを支える組織、それらが不可分に絡み合っている社会であるということも、セネガルにおける教育について考えていく際には念頭に置いておく必要があるように思う。そしてこれは実はセネガルについてだけではなく、日本など各国の教育について考える際においても、経済界からの要請と教育のあり方についての理想に関してどのように折り合いをつけていくのかという課題でもある。

今回の活動では、次章で述べるように、センターでのボランティア活動の一環としてダーラを訪問することもあったが、短時間そこに居て子どもたちと関わっただけではそれぞれの子どものトータルな生活状況やダーラやタリベの社会的な役割についての実感は得られなかったので、今後さらに注目して考えていきたい点であると考えている。

#### 4. センターでの主な2つの活動

##### (1) センターの概要と活動に参加しているボランティア

サン・ルイ市やその近郊には200ものダーラがあるということである。それぞれのダーラにはたくさん子どもたちが預けられていて、衛生環境が極めて悪く、寝る場所すら十分でないために、多くの子どもたちが路上やお店のシャッターの前、車の下などで寝起きしている。

私がボランティア活動をした施設正面には「困難な状況にある若者のためのセンター (Centre pour jeunes en difficultés)」の看板が掲げられ、そこを運営する組織として、「国境なき支援協会セネガル支部 (Association Aider Sans Frontières Sénégal)」と記されている。ダーラに住み込んでコーランを学んでいる子どもたちの学習活動や傷の手当てを主な活動内容としている。

センターの開所時間は月曜から金曜までの朝9時から12時半までと夕方4時から6時半まで、5歳から23歳ぐらいまでの年齢の子どもたちが三々五々集まって、フランス語や英語の本や文法書を使いながら読み書きを学んだり、折り紙や塗り絵、工作等の活動をしたりする時もあれば、衛生や社会のこと、他の国のこと等について学習する場合もある。

センターの門扉を入るとすぐ右手に屋上に続く階段があり、その下に水場があって、朝は集まってきた子どもたちにそこで歯磨きをさせる。建物の中は、入り口に入ってすぐ右に30人ほどの子どもたちが入って活動できる部屋があり、作業テーブル3台と長イスが10脚ほどあって、その部屋は小学生ぐらいの年齢の子どもたちの活動に使われる。入り口に入ってすぐ左には簡易治療のための部屋があり、数名の子どもたちが治療を受けるために座って待っていることもあって、場合によっては大きな傷を負ったが病院へ行けない大人も来て、傷の手当てを受けている。その先の部屋は少し小さめで、長机が2台と長イスが4脚あって、20歳前後の青年たちがフランス語や英語の読み書きを学ぶための部屋として使われている。2名から5名ぐらいの青年たちが集まっていることが多く、2、3名のボランティアで学習指導をしている。その他、スタッフのリーダーのための事務室や道具部屋、調理ができるスペースやトイレがある。

1週間のタイムテーブルが決まっていて、センター内での上記のような通常の活動を毎日継続的に行う一方で、月曜から水曜の午前中は、後述するようにセンターから遠いダーラへのアウトリーチをして子どもたちの傷の手当てを行うほか、木曜の午後にはセンターで食事を配るので1週間で最も多く子どもたちが集まり、150食ほど用意したものがほぼすべて配布し尽くされる。サンドイッチなどをボランティアが用意して、子どもたちを屋上に集め、その週で終わりになるボランティアが挨拶をして子どもたちがお礼を言ったり、身体を動かしながら歌う簡単な遊びをしたりして、その後で食べ物を順番に手を洗って取りに来させる。既にもらったものを上着の下に隠して2つめを取りに来ようとする子どももいるが、隠していることを指摘して注意すると素直にあきらめる。

センターには、リーダーである看護師と2人のスタッフ、その他にボランティアが、私が活動に参加した2019年2月最終週には私を含めて6名いて、フランスから2名、日本から2名、父がナイジェリアの出身というスイス人、父がガンビアの出身というスウェーデン人が1名ずつ集まり、フランスから来ている男子大学生以外の5名は女性だった。それぞれの活動期間は、私だけが短くて1週間、他のボランティアは2週間から数週間、数カ月、長い人だと半年もの期間そのセンターでの活動に協力しているということだった。金曜の午後にはボランティアのミーティングを行ってセンターで改善すべき点などについて意見を出し合ったり感想を述べたりする。

## (2) センターでの教育活動と子どもたちの様子

英語の絵本（『はらぺこあおむし』や『コロちゃんはどこ?』）、その他、世界地理の絵本や英語の様々なものの名前を学ぶための本）等を日本で用意していったが、小学生ぐらいの年齢の子どもたちは、お話の内容を楽しむというよりも、コロちゃんのような仕掛け絵本の各ページの仕掛けの扉を開けてみたり、あるいは、日本の百円ショップで赤ちゃん用の簡単な本を何冊か用意して持っていったのだが、「こんにちは」や「さよなら」の言葉が1ページに1つずつだけウサギなどのイラストと共に出てくるようなシンプルな絵本をフランス語に直しながら見せると、興味を示して自分でも繰り返して同じ言葉を言ってみたりして遊ぶのが楽しいようだった。

折り紙で家やピアノ、船、鶴などを折ってみせると子どもたちもチャレンジし始め、形を整えながら丁寧に折っていける子どもたちもいれば、丁寧に折っていくことが面倒になって途中であきらめて大人に頼んで完成させる子どもたちもいた。

私は玄関先に出て近所の子どもたちも一緒に本を見たり折り紙で遊んだりすることが多かったが、午前中には乳児の妹を連れて来て読み聞かせや折り紙を楽しんでいた10歳ぐらいの男の子が午後には1人で来て自分のペースで遊んでいたり、また、子どもたちどうしはセンターの前の路地でサッカーをしたりビー玉などで遊んだりしていることも多いのであるが、サッカーを抜けてひと休みしながらしっかりとしたフランス語で話しかけてきて、日本語の挨拶や簡単な会話表現を尋ねてすぐに覚えてしまうような子どももいた。子どもたちの多くはウォロフ語を主に使っているが、近隣の国々から預けられている子どもたちはまた別の言葉を母語としていて、ウォロフ語が分かっていない場合も多いようである。ボランティアの人たちは、フランス語を母語としている人もいれば主に英語を使っている人もいて、教室には簡単な会話表現がウォロフ語と英語とフランス語の一覧表になった掲示物があり、また、そのようなA4で3枚のコピーがボランティアには最初に配られ、それを見ながら子どもたちにウォロフ語を教えてもらったりもした。

### (3) ダーラへのアウトリーチとセンターでの傷の手当て

既に(1)で少し述べたように、月曜から水曜までの午前中にはセンターから遠いダーラに出向いて傷の手当てをしている。サン・ルイ市内に200ほどあると言われるダーラのうち一度に回ることができるのは3~4か所であるが、多い時には40人もの子どもたちが列に並んで手当てを受けている。リーダーのスタッフとボランティア2、3名とでタクシーに乗り込み、車で15分ほどの所で降りて数カ所を回る。リーダーの指示を受けながらボランティアが傷の手当てを行い、リーダーはノートに治療をした子どもの名前と年齢を聞き取って記入していく。

ダーラにはトイレがないところも多かったようであるが、このセンターの働きかけによりいくつかのダーラにはトイレが建てられた。

また、同じく、(1)でも述べたように、センターの一室では簡易なケガの治療が無料で行われていて、多くの子どもたちが化膿してしまった傷の手当てを次々に受けに来る。

日本語で「膿を出さる」という表現を比喩的な意味で耳にすることはあったが、ここでは、その言葉が直接に意味するものを続けざまに見るような現実に直面した。日々、何十人もの子どもたちがすでに傷口を化膿させていて治療のし直しを必要としていた。中には、右ひじの内側の化膿した傷の治療をしているうちにひじをずいぶん前に脱臼したままになっていることに治療者が気づき、毎日自分でひじの曲げ伸ばしをしてリハビリをすることを、実際にゆっくりと曲げ伸ばしをさせながら指導していたりもした。

ここに治療に来る大人の傷はさらに深刻で、男性の左足のかかと付近が深くえぐれていたり、その後が続けてきた女性は右足のくるぶしの下がやはり深くえぐれていて厚く巻いた包帯に血がにじんでいた。筆者はそのような傷の前にはどうしていいのかわからず、看護師に任せて見ていたが途中で具合が悪くなりかけて外の風に当たりに行った。筆者はここ数年、広島や長崎の原爆を描いた絵本の研究をしているのであるが、その過程で、広島での原爆投下直後に親戚の子どもを探して1週間歩き回った女性が、その中で日々であった子どもたちの傷の深刻さにたじろぎながらも治療をしたり心通い合う瞬間を共有したりした経験を描いた絵本<sup>5)</sup>に出会い、現在のセネガルでのこのような光景が七十数年前の日本にもあったことに思いを巡らせていた。

親元から離れて厳しい環境で、また、衛生状況も悪く路上で寝泊まりしている子どもたちにとって、センターはとても重要な役割を果たしていると考えられる。

### まとめ

本稿では、セネガル北部のサン・ルイ市でタリベの保護活動を行っているセンターにおいて1週間のボランティア活動に参加した経験を踏まえ、そのセンターでの活動内容やその意義、そして、この地域における教育について考えるために必要な、そのようなセネガルの大きな都市に暮らす人の生活や文化に関して、1週間の滞在を通しての考察を、特にホームステイ先で

の家族の様子に沿って記述した。それらと共に、セネガルの教育に関する日本での先行研究の状況を概観し、それらに依りながら、サン・ルイ市が植民地時代のフランス領西アフリカの統治や近代的な教育制度の普及において重要な役割を果たしてきたことを確認した。そして、そのような近代的な教育制度の枠組みだけでこの地域の教育や子どもの育ちを考えていくのではなく、数百年もの間この地に根付いているイスラムのダーラやタリベの社会的役割や意義も念頭に置きながら子どもの教育環境を考えていくことの重要性にも気づかされた。

2014年にケニアの首都ナイロビのスラム街を訪れた時にも、子どもたちが学び、生活している学校を見学させていただいた。今回のセネガルでも、アフリカの大地の活気ある都市で多くの若者や子どもたちがひしめき合う姿に圧倒された。ナイロビのスラム街にいる子どもたちも、セネガルのタリベも、この圧倒的な数の子どもたちが大人になった時に、この不遇さが再生産されて憎しみをぶつけ合うような世界になるのではなく、困った時に頼れる人がいるということ、助けてくれる人がいるということを支えに他者と共生していけるような世界を作っていかなければならないと思っている。そのような実践を続けている人たちとこれまでにケニアやセネガルで出会ってきて、心から頭の下がる思いを抱いている。2019年8月に開催された「第7回アフリカ開発会議 (TICAD 7)」の成果として採択された「横浜宣言」をきっかけに日本も今後より一層アフリカとの連携を強めていくことが予測される。経済的なつながりを新たに開拓していくと共に、先人たちの尊い活動により築いてきた信頼関係をさらに強固なものにしていくことが大切である。

筆者は小学校6年生の夏休みに両親に連れられて2週間のブラジル旅行をした。その前に父が2度にわたり数か月間ずつ JICA の仕事で滞在していたブラジル旅行への期待はとても高かったし、また、先行研究で番外的な位置づけをした馬野、渡辺 (2009) の研究では、小学校高学年の時期は西岡の著書<sup>6)</sup>に従って「地理意識の爆発核心期」と位置づけられていることが紹介されていたが、まさにその時期に、考え方も文化も生活習慣も全く異なる所を旅したことは、その後の人生を方向付ける上で決定的なものとなった。リオデジャネイロの貧民街では、自分よりも年下の子どもが裸足で物を売っていたり、サンパウロの日系人の家では、自分と同じくらいの年の子どもが家事労働のために雇われていたりしたことに対する驚きが筆者の原点になっている。帰国後に書いた作文で、人権作文を書くように、将来はそのような格差を解消していくようなことをしたいととりあえずしたためたように記憶しているが、その言葉の空虚さや白々しさを感じていた。

その後成人したのちに海外へ観光や用事で頻繁に出るようになり、その時には一般的な注意として、物乞いには警戒する態度をとっていた。

しかし、既述のように5年前にケニアを訪れた時に、青年海外協力隊の人たちが自ら、物乞いをしている障がい者やストリートチルドレンに話しかけて事情を聴いたり、なぜ保護センターに行かないのかと理由を聞いたりして、自分とのあまりの姿勢の違いに衝撃を受けた。

今回はたった1週間の滞在ではあったが、タリベの子どもたちと共に過ごし、第2章の最後

に紹介したようなエピソードもあれば、ホームステイ先での会話を何もかもできるわけではないのでウォロフ語が理解できないというのはステイ先のプライバシーを守るうえで好都合とも言えるのかな、と思ったり、また、食事の時には最初から最後まで手で食べることなくスプーンを使い続けたりと、近づこうとする部分と、自分の感覚やもっているものを保とうとする部分とのバランスを探りながらの滞在であった。

ヨーロッパやアメリカばかりを見て世界を知った気になってはいけないという思いは常にある。フランスへの訪問はすでに10回を超え、今後もますますこれまでの出会いや交流を大切に深めていきたい思いもある一方で、セネガルにも今後も出かけて行って、考えや姿勢を常に更新し続けていきたいと思っている。

#### 【注】

- 1) 阿毛 (2013, p.44), 西村 (2017, p.40) の指摘。一方で、清水によるブルキナファソでの同様の事例では、「ストリート・チルドレン」として紹介されている (2017, p.42)。
- 2) 例えば、独立行政法人国際協力機構人間開発部 (2007) 『セネガル共和国教育環境改善プロジェクト実施協議報告書』や、独立行政法人国際協力機構人間開発部 (2015) 『セネガル共和国教育環境改善プロジェクトフェーズ2 終了時評価調査報告書』等の他、西村幹子 (2017) の事例研究がある。
- 3) 手で美しく食べることの難しさやその価値については、森枝卓士 (2005) 『手で食べる?』(福音館書店) を参照。
- 4) 小川了編 (2010) 『エリア・スタディーズ78 セネガルとカーボベルデを知るための60章』明石書店, p.40。
- 5) 奥田貞子 (1983) 『ケイコちゃんごめんね』宮本忠夫・絵, ポプラ社, および、村上美奈子 (2017) 「伝え教え、そして受け止める営みとしての教育—被爆した子どもに回答した大人として、そして、原爆を語り伝えた教師としての奥田貞子—」『人間の福祉』第33号, pp.17-31。
- 6) 西岡尚也 (2007) 『子どもたちへの開発教育』(ナカニシヤ出版, p.61) は、山口幸男 (1994) 「地理意識発達の実証的究明」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 43号』pp.149-150を引いて「地理意識の爆発核心期」を位置付けている。

#### 参考文献

- 阿毛香絵 (2013) 「セネガルにおける伝統教育とクルアーン学校」『アフリカ研究』第83号, 42-46。
- 阿毛 (2017) 「小さなイスラーム教徒たち—セネガル農耕民ウォロフと遊牧民フルベ」清水・亀井編『子どもたちの生きるアフリカ』昭和堂, 21-36。
- 清水貴夫 (2013) 「ザルマ社会 (ニジェール共和国) におけるクルアーン学校: ファカラ地方の広域調査から」『アフリカ研究』第83号, 46-49。
- 清水 (2017) 「ストリートに生きる子どもたち—ブルキナファソの最大民族モシ」『子どもたちの生きるアフリカ』昭和堂, 37-51。
- 清水貴夫・亀井伸孝編 (2017) 『子どもたちの生きるアフリカ』昭和堂
- 特にその中の第I部「乾燥地に生きる」第2章「小さなイスラーム教徒たち—セネガル農耕民ウォロフと遊牧民フルベ」(阿毛), 同第3章「ストリートに生きる子どもたち—ブルキナファソの最大民族モシ」(清水), 第IV部「水辺に生きる」第2章「クルアーンを詠唱する子どもたち—マリの古

- 都ジェンネで」(伊東未来), 参照。
- 竹ノ下祐二・亀井伸孝・阿毛香絵・清水貴夫・澤村信英 (2013) 「第50回 日本アフリカ学会学術大会『アフリカ子ども学フォーラム』報告 フランコフォン・アフリカの学校教育と『伝統』教育」『アフリカ研究』第83号, 37-51。
- 特にその中の「【趣旨説明】、【報告2】セネガルにおける伝統教育とクルアーン学校」(阿毛), 「【報告3】ザルマ社会(ニジェール共和国)におけるクルアーン学校: ファカラ地方の広域調査から」(清水), 「【コメント】」澤村信英, 参照。
- 西村幹子 (2017) 「セネガルにおける親・コミュニティの学校運営への参加と教育の質—ファティク州とティエス州の8校の事例から—」『国際基督教大学 教育研究』第59巻, 121-130。
- 西村綾介 (2017) 「就学前教育とタリベと呼ばれる子どもたちの余暇支援を通じて子どもたちの暮らしを豊かなものに」アフリカ協会『AFRICA』第57号, 38-41。
- 横山真智子・杉原利治 (2009) 「青年海外協力隊活動におけるものづくりの意義」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第57巻第2号, 127-147。
- 横山・杉原 (2010) 「アフリカ・セネガル共和国における青年海外協力隊員における手工芸教育実践」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究』第12巻, 97-124。
- 横山・杉原 (2011) 「アフリカ・セネガル共和国における青年海外協力隊員における食物教育実践」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究』第13巻, 69-87。
- 藤原清太郎 (2016) 「世界の子どもの一日 6」『教育と文化』第82号, 97-103。
- 古沢常雄 (1994) 「フランス第三共和政期の植民地教育政策研究 (I) —フランス領西アフリカを中心に」『法政大学文学部紀要』第40号, 55-80。
- 谷口利律 (2009a) 「仏領西アフリカにおける学校教育の導入と言語教育政策の展開—植民地期教育改革に関する教育関連法をてがかりとして—」『日仏教育学年報』第38号, 135-145。
- 谷口 (2009b) 「仏語圏西アフリカ諸国における二言語教育—導入の理念と現状—」『比較教育学研究』第39号, 170-190。
- 小綿哲 (2017) 「セネガルにおけるフランス植民地教育の導入—行政上の背景と意図に注目して—」『教育史フォーラム』第12号, 45-66。
- 砂野幸稔 (1999) 「セネガルにおけるウォロフ化の進行と場面による言語選択: III. サンプル」『熊本県立大学文学部紀要』第5巻第2号, 1999年, 1-22。
- 砂野 (2009) 「拡大するウォロフ語と重層的多言語状況の海に浮かぶフランス語—セネガル」『アフリカのことばと社会—多言語状況を生きるということ—』三元社, 127-159。
- 馬野範雄・渡辺美紀 (2009) 「小学校における国際理解教育の単元開発—セネガルの教材化を通して—」大阪教育大学『実践学校教育研究』第12号, 48-58。
- 原ひろ子 (1979) 『子どもの文化人類学』晶文社